

やましな みち
山科の路 蓮如上人をたたえる歌
れんによしようにん うた

■楽曲データ

歌詞：長田恒雄 作詞

楽曲：清水脩 作曲

発表：日本宗教音楽協会 1948年

初演：—

初出：『山科の路—蓮如上人をたたえる歌』 日本宗教音楽協会 1948年

管理番号：M0011

■創作の経緯

蓮如上人450回御遠忌法要を機縁に創作されたとみられる。発表母体の日本宗教音楽協会は1948年、本多鉄磨・吉川孝一・長田恒雄・伊藤完夫・権藤円立・清水脩らによって結成、本部は浅草本願寺に置かれた。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『佛教讃歌』大谷派教學局 1956年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■解説

蓮如上人(1415～1499)は、中興の祖と仰がれる本願寺第8代の門主です。父・存如上人示寂後、43歳で門主を継職されました。85歳でご往生になるまでの一生は、激動する時代のなかで、また比叡山延暦寺衆徒による本願寺破却など、さまざまな迫害のなかで、近江・北陸・東海・奥州に教線を拡げ、浄土真宗の伝道・教化に身を捧げられました。

ことに、『御文章』を作成して門徒を教化されたことや、『正信偈和讃』を刊行し、門徒の人びとと共にお勤めができるようにされたことは、今日の本願寺教団の基盤を作る新しい展開でありました。

◆詞について

長田恒雄の詞は、このような蓮如上人の足跡と生涯を簡潔に表現しています。

1番では、紙衣(紙の衣)をまとい、破れた窓から月の光を見るような生活のなかで、宗祖親鸞聖人が示された如来大悲の恩徳を仰ぎ、南無阿弥陀仏の六字のみ名をよろこばれた上人の姿を、「あとぞ とうとし」と表現しています。

2番では、大谷本願寺の破却など、いくたびも危機にさらされながら、伝道の拠点吉崎や摂津、山科などに移し、常に人びとに救いの道を伝えられた上人の姿を、「あとぞ おおしき」と讃えています。

そして3番は、商人や海に網を引く漁師、山に狩をする獵師など、すべての人びとをわけへだてなく、共に御同朋と手をとって歩まれた上人の姿を、「あとぞ こいしき」と結んでいます。

◆作詞者について

作詞の長田恒雄（1902～1977）は、静岡県の真宗大谷派明通寺の出身で、東洋大学を中退。雑誌『現代詩研究』を発行・主宰し、在家仏教協会・関東学生仏教音楽研究会の理事を務めました。

仏教讃歌の作詞も手掛け、《山科の路》を作曲した清水脩とのコンビで創った楽曲も数多くあります。主な作品に、組曲《廟堂頌》や交声曲《平和》《蓮如》《大いなる母—摩耶夫人讃章》など。

◆作曲者について

作曲の清水脩（1911～1986）は、大阪の真宗大谷派の寺院に生まれ、大阪外語学校仏語部（現・大阪大学外国語学部）を卒業の後、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）で作曲を学びました。

私たちがいつも歌っている《恩徳讃》をはじめ、多くの仏教讃歌を創っています。戦後の仏教音楽の振興に、大きなはたらきをした作曲家の一人です。

◆歌い方について

曲は中くらいの速さの6/8拍子で作曲されています。親しみやすいメロディーですから、多くの方々に歌っていただきたいものです。

① 6/8拍子は、付点8分音符を1拍として、1小節を大きくふたつにとらえて歌うようにしましょう。

② 出だしの音が遅くなったり早くなったりしないよう何度も練習して、曲のテンポに乗るようにしましょう。

③ 4小節を息つきなし（ノンブレス）で、ひとまとまりに歌えるように練習しましょう。

④ 6・10・18・22小節の最後の音は、歌詞では単語のはじめ（語頭）にあたるので、はっきり発音しましょう。

⑤ 12～13小節にかけてのオクターブの跳躍は、正しい音程になるよう練習しましょう。

⑥ 20～21小節の「ああ」にクレッシェンドがありますが、声の大きさよりも内面的な心情を大切に歌いましょう。

⑦ 23～24小節の「とうとし」「おおしき」「こいしき」は、大切な言葉です。はっきりと歌いましょう。

◆音源

音源は、CD『憶念 つどいの音楽』に収録されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No.33（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第159号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.